

はじめに

伊藤 清郎

ここでは通史編1のうち、第七章から第十章までの中世篇について紹介する。

中世篇では、県内外所在の文献史料や金石文などの収集・分析をふまえ、さらに考古学の成果を積極的に取り入れ、青森県の歴史を北方世界に位置づけ、「交易と交流」をキーワードに叙述している。学術的に高度な水準を保ちながらも、県民・読者に親しまれる内容にすることを心がけながら筆を進めている。

最初に概要を紹介し、次に評価すべき点等を指摘していく。

一 概要

第七章「中世北奥の展開と鎌倉幕府」は、第一節「平泉政権の滅亡と鎌倉幕府体制の成立」、第二節「北奥に広がる北条氏の勢力と津軽安藤氏」、第三節「中世前期の社会と人々のいとなみ」という構成となっている。

奥州合戦の目的は頼朝の背後を脅かす奥州藤原氏を討滅することであった。合戦後に頼朝は奥州惣奉行を通じて奥羽の警察権・行政権を掌

握し、在地ではその権限を郡地頭が担うこととなった。特に外ヶ浜は夷島支配に通じる東夷成敗に密接に関わる地となった。

荘園公領制の中で北奥が求められた年貢は、現地の産物（金・鷲羽・絹等）と交易品であり、貢馬であった。広大な津軽・糠部（日本の東の境界で、馬の産地）は北条氏得宗（家督）の支配下に属していき、鎌倉幕府の中枢を支えた主要財源となっていた。さらに蝦夷沙汰権も奥州藤原氏から鎌倉幕府が引き継ぎ、やがて北条氏が掌握、その代官として津軽安藤氏が職権を握る。ここに主役の一族津軽安藤氏が登場してくる。支配の構造は、惣地頭―郡政所・郡検非違使所―各郷に地頭代・給主（得宗被官）というものであった。

八戸市南郷島守地区の建武年間の史料から、この時期の領主・農民の農業経営を復元する意欲的試みがなされている。

第八章「建武政権と南北朝動乱」は、第一節「建武政権と奥羽両国」、第二節「北奥の南北朝動乱」という構成になっている。

鎌倉末の北奥の大乱（アイヌの蜂起・安藤氏の乱）は、幕府の基礎を揺るがした。一方、正中の変については、北奥の乱と同列に幕府に対する反乱と認識された。

幕府倒壊後に関しては、足利尊氏と護良親王・北畠顕家との対立軸で建武政権の奥羽政策をとらえる。ここに中世後期の青森県の主役南部氏が登場してくるが、南部氏は御内人で、拠点は北奥得宗領の中に求められる。南部氏は、源義家の弟義光の子孫が甲斐国巨摩郡南部郷に定着して御家人、そして御内人となり北奥に所領を有した。鎌倉幕府倒壊後に起きた混乱のなかで、南部師行は北畠顕家から糠部郡奉行に任命され、

諸課題収束にあたり、拠点を八戸根城に置いた。西国へ二度出撃する顕家の軍勢の中に南部師行がいて、顕家が一三三八年五月和泉国堺浦で戦死した際にも従っていて、共に命を落とした。

足利尊氏の方は、斯波家長、続いて石堂義房を奥州総大将に補任し、さらに吉良貞家・畠山国氏を奥州管領に補任して、奥羽における勢力を拡大していった。観応の擾乱により奥州管領も激突。その隙をねらって南朝方北畠顕信は多賀城を奪還、南部氏もそれに加担した。翌年すぐに北朝方が国府を奪還するが、中央権力の不安定さと国人領主間の地域紛争がおさまらず、内乱は一層深刻化していく。

一方、国人が協力して地域秩序を安定させようとする動きも見え、南部氏も関わった四通の一揆契状がある。やがて有力な南朝方だった南部氏も、足利方へと転じていく。

第九章「室町・戦国の北奥世界」は、第一節「室町時代の北奥」、第二節「北奥の戦国争乱」、第三節「中世北奥の終焉」、第四節「発掘が語る中世のくらし」、という構成になっている。

陸奥国で御所と呼ばれる大崎氏・高水寺斯波氏・浪岡北畠氏、それに北奥で屋形と呼ばれる安藤氏・南部氏がこの時期の主役である。その南部氏は、一五世紀半ばに八戸南部氏から三戸南部氏へと惣領の地位が移動したという説をふまえて、それ以降の変遷を見ていく。根城跡と聖寿寺館跡の発掘からも惣領の移動が確認される。

奥州探題体制下では、南部氏の身分秩序は伊達氏・葛西氏・留守氏とともに第一グループに属していた。糠部郡は宮城郡と並んで国衙の直接の支配を受け、「守公神」を祀っていたので、「しゅくのこほり」と呼ば

れたとする。

さて発掘によって、十三湊が一三〇一五世紀にかけて日本海交通の重要港湾・湊町として殷賑を極めていたとされる。ここを支配するのが安藤氏で、室町幕府と直截な関係を有していた。

このあと一四世紀末から一五世紀初めにかけて北奥・夷島で戦乱が起きる。本州方面からの和人の進出によって生じた軋轢による蝦夷の反乱、幕府の命による可能性の高い湊安藤氏の秋田湊への進出、十三湊をめぐる下国安藤氏と南部氏の攻防と安藤氏の十三湊からの退去。南部氏傀儡の安藤師季による下北半島の支配。その師季は蝦夷島に渡海し、さらに男鹿半島に移っていく。渡島と津軽・糠部には和人とアイヌが混在し、交易が行われていたが、一四五七年コシヤマインの戦いが起こり、乱は鎮圧されるものの、この地域に不安定さは残されていく。

良馬の産地である糠部から、斯波氏を通じて献上したり、さらには室町將軍家に直接に馬を献上したりしていた。献上された良馬は、將軍家から冊封関係をもつ明へ贈られていた可能性が高い。三戸南部氏の安信・その子晴政の時代に、後の盛岡藩南部家の重臣となる家々が成立する（一五世紀末から一六世紀前半）。文化的側面でも詩歌・連歌が盛んであった。晴政は將軍義春の偏諱を受けていた。ところが内紛によって聖寿寺館が焼失し、焼失にもなつて新三戸城に移転した。その後、斯波御所と岩手郡の領有をめぐる争い、南部氏に有利に展開した。

これに対し一四五六年下国安藤師季は夷島から出羽国小鹿島へ移り、その地の領主葛西氏と対立し、さらには同盟関係にあった南部三戸氏と対立していく。移ってきた下国氏は檜山安東氏と呼ばれる。夷島は巖崎

氏に預けられ、蠣崎氏は檜山安東氏に従属した。やがて愛季のとき秋田の湊安東氏と檜山安東氏は統一し、脇本城に拠をかまえる。檜山安東氏・浅利氏と三戸南部氏が、鹿角・浪岡大光寺で合戦を繰り広げたのもこの頃。三戸南部晴政が惣領になったはじめの頃は後に南部氏の一門となる各氏との抗争が続いたが、後半には家臣化、従属化が進む。晴政の後を継いだのが田子氏から入嗣した信直で、家督継承問題はあったものの、それを乗り越えていった。糠部の諸氏が三戸南部氏へ統合されていく中で、一戸氏が滅び、九戸氏と対立が生まれた。

この頃、大浦氏が登場してくる。南部（大浦）光信が久慈から津軽の種里城に入部したのが一四九一年頃とされ、その子盛信が一五〇二年頃に大浦城に入部したとされる。一五七一年大浦為信が、石川城を攻め、信直の実父田子高信を自害に追い込む。以降、為信の下に津軽が統合され、支配体制が整えられていく。浪岡御所北畠氏は、浪岡城を拠点に外浜まで支配を伸ばし、油川を通じて夷島との交易を行っていた。しかし一五六二年川原御所の乱を機に衰退し、一五七八年津軽為信は浪岡御所を攻撃し浪岡城は落城して滅亡、津軽氏は外浜を支配するに至る。

本州アイヌについては、和人と混住・共生するとともに、漁村ではアワビ漁や海獣漁等の漁労活動と海産物の加工を行い、和人との交易を行っていた。農村では焼き畑などの農耕の比重が大きく、和人の経済システムに組み込まれてはいてもある程度の距離感を有していた。ただ短弓・毒矢をつかう戦闘要員として各領主に編成される部分もいた。幕藩体制が確立していくと、各藩に組み込まれ、津軽海峡の航行の自由が奪われ、和人社会に埋没していくと、見通しを述べる。

織田政権と北奥の関係では、南部但馬守（弥左衛門）が北奥諸氏との仲介役を行っている。日本海を通じて下国愛季が信長方と贈答を行い、従五位上侍従に補任され、政治的結びつきが強い。しかし信長が北方を支配下に治めようという意欲を読み取ることはできないと慎重な判断をしている。豊臣政権に対しては、南部信直が家臣の北信愛を通じて前田氏を窓口にして秀吉と通交する。大浦氏・下国氏も秀吉と日本海ルートで通交する。この時北奥は、三戸南部氏、津軽に徐々に勢力を伸ばす大浦氏、浪岡御所に加担して勢力を伸ばす下国氏との三氏の勢力が拮抗していた。このバランスを崩したのが湊合戦。下国・湊両家を統一した愛季が死去すると、愛季を継いだ実季、南部、大浦氏らを巻き込んで戦乱となる。秀吉は、金山宗洗を奥羽に下して、「関東奥羽两国惣無事」を伝える。この時、秋田領の扱いが大きな問題となる。

ここでは一五九〇年七月末に津軽領津軽氏・南部領南部氏・夷島蠣崎氏という近世の列島北端の政治フレームができあがっていくまでを克明に追っている。夷島まで見通した奥羽仕置は、列島極北まで集権的な体制に組み込み、ここで中世は終焉を迎えたとする。それまでの北方世界の独自性が失われていく過程でもあった。

発掘から中世の暮らしを見て、地域的特色にふれている。柱間が六尺六寸、城館に庭園遺構がない、燈明皿が土器であることが判明しない、瓦葺きはほとんど見られない等である。発掘資料から、身につけるもの、入れるもの、作るもの、祈るもの・おくるもの、等分類して考察し、室町幕府や京都・北陸との交流が活発であることを見ている。器の自給・自立性を止め、中国産・朝鮮産そして瀬戸美濃などの国内各地の窯場で

生産された陶磁器を使用し、そのすべてを県外から搬入していると指摘する。

第十章「北奥の宗教世界」は、第一節「鎌倉幕府の北進と開教」、第二節「中央教団の北方布教」、第三節「在地領主と宗教」、第四節「在地信仰の実相」、という構成になっている。

武家政権と仏教、鎌倉新仏教の伝播、板碑文化の三大思潮の三つの観点から見ている。

まず第一・二については、鎌倉幕府の宗教政策は、寺門派と東寺真言仏教系を基軸とし、それに臨齋禪を和合した禅密体制のもとにあり、北奥でもそれを推進した。藤崎護国寺も関東御祈禱所となり、「嘉元の鐘」は得宗御内人の結束強化をねらって鑄造された。文永五年の蝦夷蜂起と安藤氏の殺害を強圧的宗教指導の面から追究する。この時期の新仏教の北奥への伝播も読み取る。第三について、板碑は津軽地域に集中、鎌倉武士の移住、十三湊を中心とする日本海交通路を通じた流通・人の動きの活発化によるものにとらえる。糠部地域は、従来の信仰形態が維持されてきたととらえる。

中央教団の北方布教について、浄土真宗は、秋田浄願寺・夷島浄願寺それに外浜油川に法源寺・円明寺の開教が北方布教の先駆けとなる。大浦の専徳寺・真教寺も拠点となった。曹洞宗や日蓮宗も教線を延ばしてくる。

在地領主との関係では、津軽では、大浦氏と曹洞宗、浄土宗との関連が強い。安藤氏では、時宗、高野山信仰、熊野修験との関連が深い。糠部では、南部氏と四戸八幡宮（櫛引八幡宮）との関係が強い。南部氏が

糠部の盟主として大きく成長した一五世紀半ばには糠部三十三観音霊場が形成され、巡礼がおこなわれていたと述べる。

在地信仰については、十和田、恐山（円通寺、菩提寺）、岩木山（百沢寺）らの自然崇拜から、山岳修験との結合に基づく登拝の盛行が見られたという。

## 二 評価すべき点等

第一に興味を引く点として、①北海道厚真町のオニキシベ2遺跡・根城跡など、考古学の成果を存分に取り入れて著述し、説得力を高めている。発掘資料から人々の「いとなみ」を鮮やかに映し出している。北奥の歴史を、そこに生きた人々の生活と生き様を立ち上げて見せて、語ってくれている。考古学の成果と文献史学の成果とを融合させて総合的な著述をなす事を目標にしているが、それは十分に達成している。近年の中国史・北東アジア史研究も視野に入れたスケールの大きい著述となっている。②その考古学成果の中でも、中世遺跡の発掘調査から、本州アイヌの生活・交易・武器・装身具・戦国領主との関係等を解明していることは注目される。

③南部氏の物領の地位が八戸南部氏から三戸南部氏へと移動したととらえて、以降の歴史変遷を把握し、北奥の歴史展開を非常にわかりやすく著述している。系図等、論証がなかなか困難な部分についても丹念な考証を行って、論述している。諸説を丁寧に紹介しつつ、自説を展開する姿勢は、好感をもてる。

④後醍醐・護良親王ら天皇家は、得宗も「東夷」として扱い、幕府・得宗を揺さぶる視点として、種姓・貴賤の観念を強調していると指摘する。また出羽国については、葉室光顕の敗死によって鎮守府大將軍・陸奥大介北畠顯家の管轄下に入ったと指摘する(五五九頁)。さらに(天正四年)三月十六日、大宝寺義氏書状写から、大浦為信と大宝寺義氏が日本海海運を通じて連絡しあい、しかも湊安東氏を越えての連携があったとする(六五六・七頁)。いずれも注目すべき指摘である。なお義氏書状には、「以渡海互ニ委申承」「船路之計」と記され、しかも「客僧」が仲立ちしていることが記されている。すでに知られた史料ではあるものの、大浦為信が津軽を統合していく過程においてみると、この書状がもつ重要さが際立ってくる。

⑤コラムが興味を引く。コラム「ヌルガン永寧寺碑とアイヌの北方世界」では、松前家に伝来した硯が、三国時代の曹操が建てた銅雀台という建物の瓦でつくられたもので、アイヌの北方交易を物語る威信材であったという。一気に県史の世界が北方の世界まで広がっていく。コラム「脇本城跡」では、縄張や出土遺物にも目を引かれるが、「曲輪は動く」という指摘は興味をひかれる。コラムは九章の二つだけだが、他章にももっとあっても良かったように思う。

第二に気になった点について、奥州合戦という用語が、奥羽両国を含む合戦であることは周知のことではあるが、出羽に住むものとしてはどうもしっくりこない。奥羽合戦(奥州合戦)という表現をしてはどうか(岡田清一『吾妻鏡』の功罪)、『東北福祉大学生涯学習支援室年報』19、二〇一八年)では、この表記をしている。次に、織田信長と通交

した記録が確認できる奥羽の大名・国衆の中に最上氏を入れるべきではなかったか(六七三頁)。続いて「陸奥の諸大名では、伊達・南部・最上氏」とあるが、最上氏が入っているのも、「奥羽の諸大名」とすべきだったのではないか(六九九頁)。それに第十章が若干薄く、史料の残存から仕方ないのであるが、惜しまれる。

第三に編集上注目される点について、青森県史資料編・史料番号それに文書群(史料群)名も略記で記載され、典拠が明示されている。これも資料編がしっかりしている故の記載である。カラーなので図版も見やすい。なじみのない歴史用語には( )で解説を付け、史料には―(傍線)を付して見やすくする工夫をしている。しかも平易な文章表現に努めていて、読みやすい。さらに各章毎に色分けされていて、開きやすく工夫されている。巻末の「図版一覧」も、枠線を引いて一覧表にしているので見やすい。参考文献もていねいで、より深く追究しようとするものへの配慮が読み取れる。

ただ図写真を多数掲載し、実に読みやすくしているのであるが、古文書の写真は小さくてなかなか読めないものもある(拡大鏡を使用して)。とても残念であり、もう一工夫してもらおうとありがたかった。

## おわりに

以上、通史1は、『青森県史 資料編 中世1〜4』、『青森県史 資料編 近世1』に蒐集された史資料を縦横に駆使して著述している。東北の地から日本の歴史を描き直すというのが引き続き大きな課題である

ことはいうまでもないが、北奥青森の大地から日本列島を俯瞰することに成功しており、その結果、中世の青森県をスケール大きく描くことに繋がっている。自治体史編纂に関して実り多い多くの教訓を与えてくれる成果である。

この通史Ⅰが編纂のねらい通りに、県民に親しく読まれ、郷土青森県を深く知り、それにより青森の歴史文化を受け継いでいくことに繋がっていくことを強く切望する。とともに広く研究にも利用されていくことを願っている。

最後になったが、筆者の理解不足や誤読によって、見当外れの指摘等があるかもしれない。その点、執筆者、編纂及び編集に携わった方々に御海恕をお願い申し上げる次第である。

(菊判、七八七頁、青森県、平成三十年(二〇一八)三月十五日刊行、

本体価格三二〇〇円＋税)

(いとう・きよお 山形大学名誉教授)